支部だより

「まてりあ」60巻を祝して
―日本金属学会九州支部の活動を顧みて―

九州支部　第22代支部長　東　田　賢　二*

日本金属学会会報「まてりあ」60巻，おめでとうございます．1937年，日本金属学会創設と共に発刊された日本金属学会誌，そして1960年に創刊されたTransactions of the Japan Institute of Metals（現 Materials Transactions）に続き，1962年に本会三番目の定期刊行物として発刊された当会報が60巻という記念の区切りを迎えることになりましたこと，衷心よりお慶び申し上げます．また，当会報のためにこれまでご尽力されて来られた多くの皆様方に深く敬意を表します．

当会報の創刊時の会長であられた大日方一司先生は，「日本金属学会会報発刊の辞」の中で，その発刊について「本会創立当時からみますと大きな発展でありますが，このことはわが国金属関係の科学，技術の進展に即応する必然の企画であるといえましょう」と述べておられます(1)．日本金属学会誌が学術論文に統一される一方で，解説や総説，技術資料，学会活動ほか多岐にわたる情報提供を担う会報の役割は極めて重要なものであるといえます．

さて，日本金属学会九州支部は1942年に，今井弘先生（九州帝国大学教授）を初代支部長としてスタートしました（九大冶金学科は1911年設置）．そして，現支部長（第25代）の中島邦彦先生（九州大学教授）に至るまで，九州地区の研究者・技術者の皆様のご協力・ご支援の下，旺盛な活動を続けて来ました．その主なものをご紹介いたしますと，以下のようです．

まず，日本金属学会，日本鉄鋼協会，軽金属学会各九州支部の合同学術講演会が，毎年６月に開かれています．その開催は，九州大学，九州工業大学，熊本大学が順番に世話役を担当し，毎回200名を超える参加者と共に，シンポジウム講演，一般講演，英語講演，ポスターセッションが行われています（**図１**参照）．そこでは学生を対象にした口頭発表賞，ポスター賞も授与されます．このような講演大会は，九州地区の大学，高専や企業における研究活動の情報をお互いに共有する場となると共に，特に学生諸君にとっては，自らの研究を他の研究者や技術者に聴いてもらうことを通してその面白さを体感し，大きく成長するきっかけを得る重要な役目を果たしているように思われます．さらに，全国大会に向けて意欲を高める大切な機会ともなっています．

また，毎年３月と10月には，日本鉄鋼協会との合同で春季講演会，秋季講演会が開催されます．日本製鉄八幡製鉄所，同大分製鉄所，九工大，熊大，長崎大学，鹿児島大学，九大などが持ち回りで世話役を担当しています．その中で，春季は湯川記念講演会（鉄鋼協会九州支部担当），秋季は湯川記念講演会と本多記念講演会（日本金属学会九州支部担当）が行われます．また，それと合わせて，特定のテーマの下に講演討論会が企画され，複数の講演と共に熱心な討論が展開されています．例えば2019年の春季講演会では「先端的実験と数理解析による材料研究の新たなる展開」，同年の秋季講演会では「安心・安全に関する高機能鋼板」など基礎から応用に至る多様なテーマが取り上げられています．

図１　合同学術講演会でのポスターセッション（2018.6，北九州国際会議場）．（オンラインカラー）

以上のような催しに加えて，「材料科学談話会」そして「材料プロセス談話会」と呼ばれる研究会が不定期に，日本鉄鋼協会九州支部との共催で年に複数回開催されています．そこでは海外からの訪問者を含め多彩なゲストスピーカーを迎えて，盛んな議論が展開されています．

COVID-19の影響を受けて令和２年度の九州支部の活動はほとんど中止されてしまいましたが，令和３年度においては，６月11日に合同学術講演会（一般講演，英語講演，ポスターセッション）がオンラインで無事開催され，例年並みの多くの参加者を得て，活発な議論が展開されました．さらに，秋季講演会も10月25日にオンラインで開催予定であり，支部活動も多くがネット経由ではありますが，確実に回復しつつあります．

日本金属学会初代会長であり「鉄の神様」と言われた本多光太郎先生は，日本金属学会誌の創刊号冒頭の「創刊の辞」において，日本金属学会と日本鉄鋼協会について「両学会は車の両輪の如き関係を有し何れの一つを欠くことも出来な

* 九州大学 鉄鋼リサーチセンター；特任教授（九州大学名誉教授）

い」との言葉を残しておられます[2]．学問や研究は自由であり，一切の垣根は有りません．時代の流行を徒らに追わず，その一方で真に革新的なもの対しては鋭敏な嗅覚をもって，産と学とが，そして今日の材料系の学会すべてがその境界を越えて真剣勝負の議論を展開して行くことが極めて重要と考えます．その中で日本金属学会，そしてその会報「まてりあ」が中核的な役割を果たして行くことを心より願って止みません．

文　　献

（1）大日方一司：日本金属学会会報，**1**(1962), 1–2.
（2）本多光太郎：日本金属学会誌，**1**(1937), 1–2.

(2021年8月5日受理)[doi:10.2320/materia.60.663]

◇　◇　◇